

岩屋洞窟遺跡出土の擦文式土器

高島 孝宗¹

¹ オホーツクミュージアムえさし

資料の来歴

枝幸町資料館施設「オホーツクミュージアムえさし」は、平成 18 年 3 月の枝幸・歌登両町の合併により、旧歌登町の収集した考古資料の再整理を進めてきた。

このうち、旧石器時代の資料については、東京大学常呂実習施設を中心とする研究グループによって紹介されている（役重、山田、佐藤、高島 2011）。

一方、縄文時代以降の資料については出土地点が多不明なものも多く、その多くが未報告となっている。本稿で資料紹介する「岩屋洞窟遺跡出土資料」は、旧歌登町教育委員会に保管されていたもので、資料収集にいたる経緯については不明なもの、「岩谷左側小洞窟」と明記されていた。岩屋洞窟付近で採集されたことはほぼ疑いないことから、岩屋洞窟遺跡採集資料として、本稿で紹介するものである。

資料は紙封筒に入った状態で、旧歌登町教育委員会の事務局が置かれていた「歌登生活改善センター」の倉庫に保管されていた。新町合併後の資料移管の際にミュージアムに持ち込み、拓本・写真撮影等の再整理を行った。

遺跡の立地

本稿で取り扱う岩屋洞窟遺跡（北海道教育委員会埋蔵文化財包蔵地登録番号 H-05-69）は、枝幸町の西部、旧歌登町の「ポールン別」地区に所在する。

この地区は、北見山系の北端に近い音威富士（489m）の東斜面にあたり、枝幸町を東西に貫流

する北見幌別川の最上流域に位置する。遺跡は、北見幌別川の支流、「岩屋ポウルンベツ川」の左岸段丘崖に開口した洞窟内に立地する（写真 1. 図 1.）。

枝幸町最高峰の函岳（1,129m）から、屋根棟山、音威富士へと連なる北見山系の北辺は、宗谷地方と日本海側との分水嶺となっており、岩屋洞窟遺跡は、枝幸地方で最も内陸深くに立地する遺跡と言える。

遺跡の所在する「ポールン別」地区の名称は、「ポル・ウン・ベツ」【poru-un-pet】で、「岩窟がそこにある川」と解されている（新潟 1986）。

「ポールン別」という地域の名称そのものが、岩屋洞窟に由来していることは疑いない。

岩屋洞窟は全体が石灰岩で形成されていたと考えられる。枝幸地方の石灰岩は、日高累層群中の輝緑凝灰岩やチャートと互層して挟まれており、岩屋洞窟は新第三紀鮮新世の本幌別層中に日高累層群が窓状に表れたものとされる（北海道立地下資源調査所 1962）。かつては洞窟内に石筍もあったと言われている。



写真 1. 消滅する前の岩屋洞窟（昭和 26 年頃）

¹ 〒 098-5823 北海道枝幸郡枝幸町三笠町 1614-1



図1.岩屋洞窟遺跡の位置

遺跡の発見と消滅

岩屋洞窟の存在は古くから知られていたが、「埋蔵文化財包蔵地カード」の情報によると、昭和13年8月6日に辻本金蔵によって「発見された」とあり、採集資料も辻本の手による可能性が高い。

戦後の歌登村では、農地改良のための肥料の確保が課題となり、岩屋洞窟付近では、昭和28年から歌登石灰工業株式会社による石灰岩の採掘がはじまった。

開発がはじまった当初は「無尽蔵」とも形容されていたが、昭和32年頃から原鉱石の不足が目立ちはじめ、ついに資源不足によって岩屋洞窟そのものが砕かれ、昭和34年には操業を停止した。

歌登町史では、貴重な文化財である岩屋洞窟を破壊したことや、その後の処理について厳しい評価を与えている（富沢編 1970）。

資料紹介

岩屋洞窟遺跡採集とされる資料は全て土器の小片である。土器片は約30点を数えるが、本稿では拓本をとることができた21点を紹介する。いずれも擦文式土器である（図2.）。

図2.1～4は、いずれも高杯の口縁部破片。口縁部の直下に幅の狭い隆起帯を作りだし、綾杉文を巡らす。

図2.1は、内黒で口唇は丸みを帯びる。

図2.2は、口縁の内面をヨコにナデる。内黒で、口唇は丸みを帯びる。

図2.3は、口縁直下の外面をヨコにナデており、口唇はやや角張る。内面は黒色処理されている。

図2.4は、内面をヨコにナデており、内黒。口唇は丸みを帯びる。

図2.5は、小型土器の口縁部破片。内黒で口唇

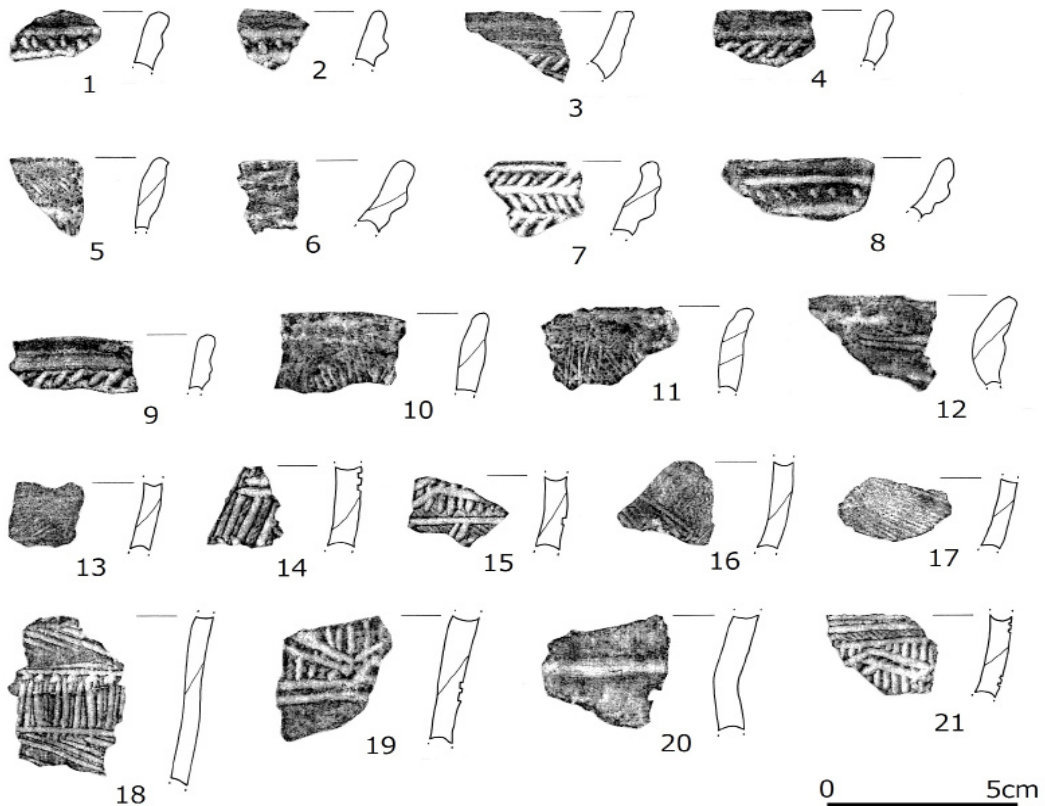


図2.採集土器の拓影図 (縮尺1/2)

は丸みを帯び、外面がわずかにふくらむ。

図2.6は、高杯の口縁部破片。外面に2段の隆起帯を作りだし、鮮明ではないが綾杉文が巡る。内黒で口唇はやや丸みを帯びる。

図2.7は、小型の鉢、または高杯の口縁部破片。口縁直下に3段の綾杉文が巡り、丸みを帯びた口唇はわずかに内反する。内面は黒色処理されている。

図2.8は、高杯の口縁部破片。摩耗が進んでいるが、口縁直下に隆起帯をつくりだし、綾杉文を巡らす。内黒で、口唇は丸みを帯び、わずかに内反する。

図2.9は、高杯の口縁部破片。口縁直下をヨコにナデており、その下位に綾杉文が巡る。図2.3と同一個体の可能性が高い。

図2.10は、高杯の口縁部破片。丸みを帯びた口唇はわずかに外反し、外面には細い斜行刻線文

が施される。内面は黒色処理されている。

図2.11は、杯、または高杯の口縁部破片。胎土に砂を多量に含んでおり、丸みを帯びた口唇はわずかに外反する。内面はヨコにナデて、黒色処理されている。外面は弱々しい刻線文が交差する。

図2.12は、杯の口縁部破片。内外面をヨコにナデて調整し、胎土に砂を多量に含む。内面は黒色処理されている。

図2.13は、小型の鉢、または杯の胴部破片。摩耗が進んでおり、詳細な観察は難しいが、表面には刷毛目による調整が確認できる。

図2.14～15は、鉢の頸部破片。表面に文様帯を区画する横方向の刻線文と斜行する刻線文が施される。内面は黒色処理されている。

図2.16は、鉢の胴部破片。内黒で外面は刷毛目調整。

図2.17は、鉢、または杯の胴部破片。摩耗し

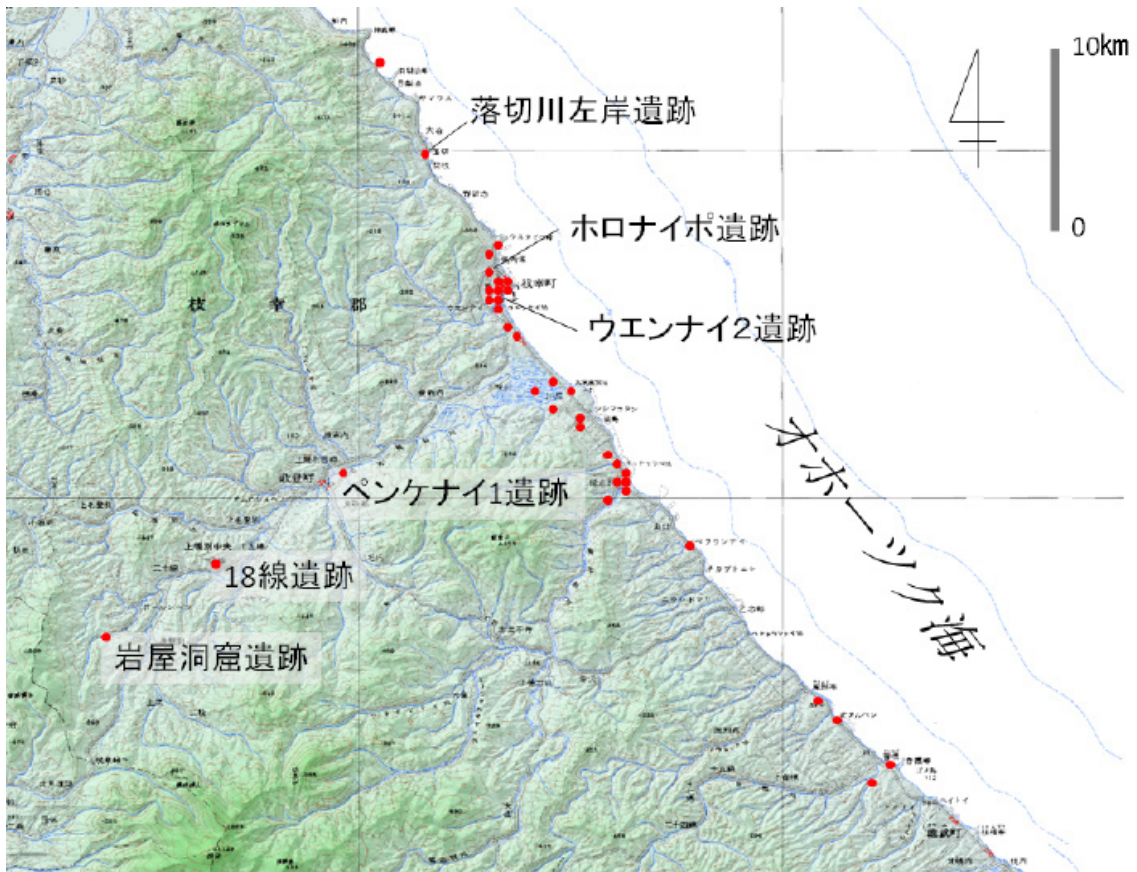


図3. 枝幸町における擦文時代の遺跡分布 (図中●印が擦文時代の遺跡, カシミアール3Dにより作図)

ているが外面は刷毛目で調整される。内黒。

図 2.18 は、小型の鉢の頸部破片。横走る刻線文によって文様帯を画しており、上から斜行刻線文、列点文と縦位の刻線文、さらに斜行刻線文が施されている。薄手に作られており、内面は黒色処理されている。

図 2.19 は、深鉢の頸部破片。文様帯を画する横走刻線文の上に、縦位の刻線文と山形の刻線文を重ねる。内黒で摩耗が進んでいる。

図 2.20 は、深鉢の頸部破片。無文で頸部の立ち上がりをタテにナデて調整している。胎土に砂を多量に含み、内面は黒色処理されている。

図 2.21 は、鉢の頸部破片。文様帯を画する横方向の刻線文の下位に縦位の刻線文を巡らし、山形の刻線文を重ねる。施文は明瞭で、内黒となる。

資料はいずれも小片で数も少ないため、文様構成を知る手がかりは少ないが、図 2.18 に見るように頸部文様帯が複段構成で、斜格子刻線文を多用することから、宇田川編年後期後半の土器群と考えられる(宇田川 1980)。高杯と推定される土器片が伴出していることも擦文時代後期に位置づける証左となろう。

枝幸町内では、ホロナイボ遺跡(佐藤 1980: 1981)、ウエンナイ 2 遺跡(佐藤 1983)、落切川左岸遺跡(佐藤、高島 1999)で、擦文時代後期の集落遺跡を発掘している。また、測量調査を行ったウスタイベ堅穴群(川名、藤原、内山、高島 2014)についても、表採資料から擦文時代後期とされており、岩屋洞窟遺跡はこれらの集落遺跡とほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

枝幸町における擦文時代の遺跡分布

枝幸町内には前述したホロナイポ遺跡をはじめとして約 40 ケ所の擦文時代の遺跡が残されており、その多くはオホーツク海に注ぐ河川の河口域に立地している。特に現在の「枝幸市街地」、「北見幌別川河口域」、「徳志別川河口域」の 3 つの領域に遺跡が多く集中している (図 3)。

集落遺跡は 30～50 軒規模のものが多く、100 軒を超える大規模なものも珍しくない。枝幸市街地付近では、ホロナイポ遺跡 (130 軒)、ウエンナイ竪穴群 (636 軒)、モウツ竪穴群 (400 軒以上)、北見幌別川の河口域で、幌別原野遺跡 (約 400 軒) などが上げられる (佐藤 1983)。

一方、海岸線から転じて内陸に目を向けると擦文時代の遺跡は激減する。内陸の歌登地区に存在する擦文時代の遺跡としてはペンケナイ 1 遺跡があげられる。この遺跡は、北見幌別川右岸の低位段丘面に立地しており、北見幌別川とその支流ペンケナイ川との合流点に近い。竪穴式住居跡は確認されていないが、これまでに 10 個体以上の土器片が得られており、一定の利用があったようだ。

18 線遺跡については、「埋蔵文化財包蔵地カード」には記載がないが、表採資料に擦文式土器が 1 片含まれていることから、擦文時代の遺跡に加えた。北見幌別川本流の左岸段丘上に立地する。

枝幸町における擦文時代の遺跡分布は、枝幸市街地、北見幌別川河口域、徳志別川河口域の 3 つの領域を中心に海岸線に沿って広がっている。

一方で、内陸部の擦文時代の遺跡は、現在のところ、北見幌別川本流に沿った領域でしか確認されていない。中でも岩屋洞窟遺跡は、その最上流域にあたる。

岩屋洞窟遺跡の評価

本遺跡は、前述したとおり昭和 30 年代初頭に石灰採掘の目的で破壊されており、遺跡そのものの再調査は不可能である。

一方、内陸奥深くに孤立した位置にあり、洞窟

という特異な立地環境にある本遺跡は、枝幸地方の擦文時代の人々の社会を復元するにあたって、興味深い可能性を示唆している。

(1) 交通の中継拠点としての岩屋洞窟

岩屋洞窟遺跡の立地する北見幌別川の最上流域は、一山を越せば日本海側の天塩川水系へといたる交通路の中継地にあたる。

交通網が整備される以前の枝幸地方では、北見幌別川が枝幸海岸部と内陸部とを結んでおり、明治 32 年の枝幸砂金の発見も、北見幌別川を遡った堀川泰宗の探検隊によって成し遂げられた (日塔 1967)。

枝幸海岸部の擦文人が、交易などを目的として上川地方や日本海沿岸地方に向かう際には、北見幌別川を遡行し、山越えした可能性が考えられる。

北見幌別川に沿って、ペンケナイ 1 遺跡、18 線遺跡、岩屋洞窟遺跡と連なる住居を伴わない擦文時代の遺跡群は、先史時代の交通路・交易路を示す可能性がある。

洞窟という地形は、山越えの際に天候が急変した時などの待避場所としても適していたのかもしれない。

(2) 祭祀・儀礼の場としての岩屋洞窟

擦文時代の洞窟遺跡としては、泊村沿岸 (日本考古学協会洞穴遺跡調査委員会 1967)、豊浦町小幌洞窟 (北海道大学解剖教室調査団 1962)、稚内市抜海岩陰 (佐藤 1964)、神恵内村観音洞窟 (宇田川、河野 1984; 千代 1984 ほか多数)、羅臼町オタフク岩洞窟 (涌坂 1991) などが上げられる。

これらの洞窟遺跡はいずれも海岸に面した海食洞窟であり、海にかかわる生業の拠点としての利用が想定されている。一方、羅臼町オタフク岩洞窟では、トビニタイ期に構築された墓壙を一部破壊して、擦文時代の「熊集骨」が構築されている。オタフク岩洞窟の動物遺体を分析した西本豊弘・佐藤孝雄は、ヒグマの頭蓋骨の集積がアイヌ文化の「イオマンテ」につながる可能性を指摘している (西本、佐藤 1991)。

オタフク岩洞窟の例に見るように、擦文人は、洞窟という地形を「生業の場」としてだけでなく、集落とは隔絶した「儀礼の場」として認識していたのではないか。周辺に集落の存在しない岩屋洞窟は、狩猟活動の拠点（ハンティング・キャンプ）としてだけでなく、祭祀や儀礼などの「祈りの空間」として使用された可能性も考えられる。

わずかな資料ではあるが、本稿で紹介した21点の土器片の多くは小型の鉢や高杯であり、日々の暮らしで煮炊きに使用するような大型の深鉢は見られない。こうした器種組成は、岩屋洞窟遺跡の「非日常性」を示唆している。

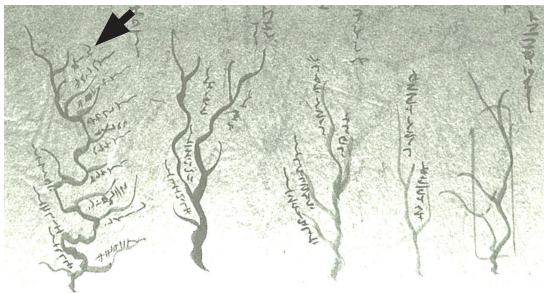


写真2 武四郎の記録した「ポール」と「ルベシベナイ」『川筋取調図』（秋葉解説、1988）より転載、矢印加筆

擦文時代以降の「岩屋洞窟」

アイヌ文化期以降の岩屋洞窟について知るには、幕末に枝幸を訪れた松浦武四郎の記録によるほかない。

『西蝦夷日誌巻之七』の記述では、幌別川筋の記録の中で、「ホール大岩洞 南岸大洞にて、是より奥には神霊有とて上らず。驚多く住と云也」と記している（秋葉解説 1988）。武四郎が「神霊有」として、アイヌ民族の信仰の対象となっていたことを示す記述を残しているのは、枝幸地方では他に神威岬（カムイ・エトウ）しかない。

また、岩屋洞窟に近い北見幌別川の支流について、「ルベシベナイ 右川 昔しは是より天塩へ越たりと云り」とあり（秋葉解説、前掲）、さらに『竹四郎廻浦日記巻の二十二』では、「後ろはテシホ川筋のハンケナイ辺に当る聞り。往昔はルベシ

ベナイより越せし土人有しと。今はなし」と書き残している（高倉解説 1978）。

アイヌ文化期には、岩屋洞窟付近の北見幌別川支流「ルベシベナイ」を遡行し、山越えて天塩川水系に至る交通路が存在していたようだ（写真2）。

周知のようにアイヌ民族は、海岸や河岸の洞窟を「あの世へ行く道の入り口」（アフルナル）として、特別な場所と考えていたとされ（知里、山田 1956）、考古学の視点での研究も進められている（菅野 2013）。

武四郎の記録によれば、岩屋洞窟は神聖な場所であり、この地より先に上ってはならないという「畏れ」の感情をいだかせる場所であったことがわかる。枝幸地方で岩屋洞窟が「アフルナル」として認識されていた可能性が高い。

また、武四郎の記録によって、「ルベシベ」という名の示す通り、岩屋洞窟の下流付近から日本海側の天塩川水系へと至る交通路が存在したことも明らかとなった。岩屋洞窟は、アイヌ文化期の天塩—宗谷を結ぶ交通路に隣接していたと言える。

明治時代以降の日本人開拓者たちにとっても岩屋洞窟は「特別な場所」だったようだ。

ポールン別地区は、明治39年に岡山県から入植した影山清蔵が初めて開拓の鋤を入れ、大正2年に数戸が入植し、開拓の基礎を築いた。さらに昭和23年からはじまった緊急開拓により13戸が入植、昭和26年には福島県から8戸の入植があり、開拓地は活況を呈した（写真3）。



写真3 福島団体の緊急開拓（昭和26年頃）

明治大正期における岩屋洞窟の状況について

は、必ずしも明らかではないが、昭和初期の岩屋洞窟の状況については、聞き取り調査からその輪郭が浮かび上がってきた。

枝幸町歌登毛登別の小椋忠義氏によれば、幼いころにポールン別地区を訪ねたおりに、岩屋洞窟に入ったことがあるという。

また、当時（昭和10年代）は、地区で「岩屋のお祭り」を催しており、「相撲をとった」とのお話であった。

曾祖父がポールン別の開拓に関わっていた開地保氏によれば、昭和初期の岩屋洞窟は「洞窟の入り口に鳥居が祀られていた」とのことであり、当時を伝える写真が残されている（写真4.）。



写真4.岩屋洞窟前の鳥居（昭和初期，開地保氏提供）

地域住民からの聞き取り調査によって、岩屋洞窟が石灰鉱山として開発される昭和27年以前は、開拓者たちから「神聖な場所」として祀られていたことが明らかとなった。

まとめ

岩屋洞窟遺跡出土の擦文式土器の資料紹介を軸として、岩屋洞窟の位置づけについて地域の資料をたどって考察を行った。以下に本稿を小括したい。

1. 岩屋洞窟遺跡は、出土した土器の型式から「擦文時代後期」に位置づけられる
2. 岩屋洞窟遺跡は、ホロナイボ遺跡などの枝幸海岸部の集落遺跡群とほぼ同時代と考えられる
3. 岩屋洞窟遺跡は枝幸地方から天塩川水系へと移動する交通路の中継地だった可能性がある
4. 岩屋洞窟遺跡は擦文人の「祈りの場」だった可能性がある
5. アイヌ文化期には岩屋洞窟は「アフルパル」と認識されていた可能性が高い
6. アイヌ文化期には岩屋洞窟の下流から山越えて天塩川水系に至る交通路が存在した
7. 明治時代以降の開拓者たちも岩屋洞窟を祀っていた

擦文人が利用し、アイヌ民族や日本人開拓者が「神聖な場所」として大切に敬ってきた岩屋洞窟は、石灰採掘のために破壊され、今は見るできない。

一方で、わずかではあるが土器片を採集し後世に伝えてくれたことで、失われた岩屋洞窟の意義について、その一端を考察することができた。地域に生きた先人の努力に深く感謝したい。

本稿の土器片の拓本および図版作成は、オホーツクミュージアムえさし臨時職員（当時）の仲沢真紀子が担当し、高島が編集した。

今回の資料紹介にあたり、歌登毛登別の小椋忠義氏には貴重なお話を賜った。また、歌登東歌登の開地保氏からは往時を伝える写真を提供いただき、本稿への掲載を快く許可いただいた。

明記して感謝申し上げ、本稿を擲筆する。

参考文献

- 秋葉実解説．1988．武四郎蝦夷地紀行．北海道出版企画センター
- 宇田川洋．1980．擦文文化．北海道考古学講座．みやま書房
- 宇田川洋，河野本道．1984．神恵内村観音洞窟遺跡の遺物．河野広道博士没後二十年記念論文集．北海道出版企画センター

川名広文, 藤原聖史, 内山幸子, 高島孝宗. 2014. ウスタイベ竪穴群測量調査報告. 枝幸研究 5
佐藤隆広. 1980. ホロナイボ遺跡. 枝幸町教育委員会
佐藤隆広. 1981. ホロナイボ遺跡Ⅱ. 枝幸町教育委員会
佐藤隆広. 1983. ウエンナイ 2 遺跡. 枝幸町教育委員会
佐藤隆広, 高島孝宗. 1999. 落切川左岸遺跡. 枝幸町教育委員会
佐藤隆広. 1983. オホーツク海沿岸における擦文

文化. 考古学ジャーナル 213
佐藤忠雄. 1964. 稚内・宗谷の遺跡. 稚内市教育委員会
菅野修広. 2013. あの世の入口とくぼみの他界観. 北海道考古学 49
高倉新一郎解説. 1978. 竹四郎廻浦日記下. 北海道出版企画センター
千代肇. 1984. 積丹半島神恵内観音洞窟の調査. 河野広道博士没後二十年記念論文集. 北海道出版企画センター
知里真志保, 山田秀三. 1956. あの世の入り口



写真 5. 岩屋洞窟遺跡出土の擦文式土器

- いわゆる地獄穴について— . 北方文化研究報告 11
- 富沢英編 . 1970. 歌登町史 . 歌登町
- 新岡武彦 . 1986. 枝幸郡アイヌ語地名解 . 北海道出版企画センター
- 西本豊弘 , 佐藤孝雄 . 1991. オタフク岩洞窟遺跡出土の動物遺体 . オタフク岩遺跡 . 羅臼町教育委員会
- 日塔聡編 . 1967. 枝幸町史・上巻 . 枝幸町
- 日本考古学協会洞穴遺跡調査委員会 . 1967. 日本の洞穴遺跡 . 平凡社
- 北海道大学解剖教室調査団 . 1963. 小幌洞窟遺跡 . 北方文化研究報告 18
- 北海道立地下資源調査所 . 1962. 5 万分の 1 地質図幅説明書・音威子府 . 北海道開発庁
- 役重みゆき , 山田哲 , 佐藤宏之 , 高島孝宗 . 2011. 宗谷地方における後期旧石器時代石器群～旧歌登町表採資料の紹介～ . 東京大学常呂実習施設研究報告 8
- 涌坂周一 . 1991. オタフク岩遺跡 . 羅臼町教育委員会